

資格取得を動機づけに利用した 大学生に対する情報リテラシー教育の効果(1)

米田 里香、樋口 勝一

1. 序論

本研究の目的は、大学生が入学時にどの程度の情報リテラシーの能力を持っているかを把握し、学生の現状に合わせた講義をおこなった結果、学生のパソコン基本操作能力(以下「スキル」という)や意識がどのようになったかを調べることである。

著者らは、本研究調査をおこなうまえに7年間、大学生における情報リテラシーの講義を担当してきた。情報化社会ということでパソコンの普及率の高まる一方で、受講前の大学生のパソコンスキルは驚くほど低いものであった。

- ・ 正確な文字入力ができない
 - ・ ファイル操作ができない、または、そのしくみがわかっていない
 - ・ 電子メールの送受信ができない、または、そのしくみがわかっていない
- という学生が約半数以上いると感じられた。

この間に、小中高の各学校でのカリキュラムに「情報」、つまりパソコンの操作が組み込まれたり、また、家庭でのパソコンの普及率も高まったりしてきた。当然、上記のことが改善された学生が入学してくると期待していたのだが、我々の期待はずれた。実際に情報教育に携わらない人たちからは、「これだけパソコンが普及し、小中高の学校でも習ってきたのだからそんな

はずはない」という意見もある。しかしながら、著者らは7年間、情報リテラシーの講義を担当してきて、学生の入学時におけるパソコンの基本スキルがパソコンの普及に併せて向上したという実感がない。

そこで、本研究は、大学生の入学時におけるパソコンに関する基本スキルを調査した。そして、学生の入学時点での能力に合わせた講義をおこない、その結果、スキルと意識がどのようになったかについても調べた。なお、講義では、学習の動機づけとして、日本語ワープロ技能標準試験（ICT利活用推進機構）¹⁾ という資格検定試験を利用した。

2. 方法

(1) 調査対象

アンケート調査をおこなった。調査対象は、本学、平成19年度入学1回生全員（欠席者と講義放棄者は除く）である。なお、本学は、文学部のみの単科大学で、国際英語メディア学科（EM学科）と心理こども学科（PC学科）がある。必修・共通科目である「情報リテラシー1」の第1回講義（入学時）と最終回の第15回講義終了時にアンケートに回答してもらった。

(2) 入学時アンケート

第1回講義のアンケート内容は、「経験」についての5問、

Q1 パソコンを操作したことがある

Q2 インターネットをしたことがある

Q3 パソコンで文字入力ができる

Q4 高校でパソコンの授業があった

Q5 ワードを操作したことがある

と、「パソコンの基本スキル」についての6問（PC学科のみ）、

Q6 パソコンの起動と終了ができる

- Q7 アプリケーションの起動と終了ができる
- Q8 ウィンドウの操作ができる
- Q9 データの保存ができる
- Q10 フォルダを作成することができる
- Q11 ファイルのコピーができる

さらに、「ワードの基本スキル」に関する質問7問、

- Q12 文字を入力し、修正や、削除ができる
- Q13 文字のサイズやスタイルを変更できる
- Q14 文字の配置(右揃えなど)ができる
- Q15 インデントが理解できている
- Q16 箇条書きが理解できている
- Q17 表の作成ができる (表を作成して文字入力まで)
- Q18 表の編集ができる (文字編集、セル幅・行の調節、罫線変更)

(3) 「情報リテラシー1」の指導内容

現状の学生のスキルに合わせた指導内容とした。

- ・ファイル操作
- ・文字入力 (タイピングソフトを含む)
- ・ワープロソフト (マイクロソフト「ワード」) の基本操作
- ・ビジネス文書作法

の内容を重点的に指導した。また、学生への動機づけのため

・ICT利活用力推進機構の実施する「日本語ワープロ技能標準試験」の2級・3級の合格を目標の1つとした。2級・3級とも「入力問題」と「ビジネス文書作成」の2種類の試験を課し、両方とも合格基準を満たした者のみが検定合格となる。内容と基準の概略を以下の表1¹⁾に示す。

表1

3級内容：ワープロソフトの操作に関して初歩的な技術を有し、ビジネスにおける文書の初歩的な知識を有する。

| | 3級内容 | 合格基準 |
|--------|---|----------------------------------|
| ビジネス文書 | ①制限時間20分 ②初歩的なビジネス文書(表作成を含む) ③答案用紙はA4判1枚(制限時間外印刷) ④出題区分 移動、挿入、削除、訂正、アンダーライン、センタリング、右寄せ、複写、拡大文字、半角処理、網かけ、文字の種類、簡単な表の作成など | 70% |
| 入力 | ①制限時間10分 ②35字詰め原稿、35字詰め入力(全角文字換算) ③300字現代文 ④答案用紙はA4判1枚(制限時間外印刷) | 290字以上 誤字・脱字・余字等 合計で10文字以内 |

2級内容：ワープロソフトの操作に関して標準的な技術を有し、ビジネスにおける文書実務の基礎的な知識を有する。

| | 3級内容 | 合格基準 |
|--------|--|----------------------------------|
| ビジネス文書 | ①制限時間25分 ②基本的なビジネス文書(表作成を含む) ③答案用紙はA4判1枚(制限時間外印刷) ④出題区分 3級に加えて 校正記号による処理、インデント、タブ、桁揃え、部分的な縦書き、均等割付、罫線の扱い、丸付文字、ローマ数字、簡単な図形処理、演算、ページ設定の変更、グラフ、ソート、置換 | 70% |
| 入力 | ①制限時間10分 ②35字詰め原稿、35字詰め入力(全角文字換算) ③400字現代文 ④答案用紙はA4判1枚(制限時間外印刷) | 290字以上 誤字・脱字・余字等 合計で10文字以内 |

※なお、2・3級ともにビジネス文書と入力の両科目が合格基準を満たして初めて合格となる。

(4) 情報リテラシー1終了時アンケート

情報リテラシー1の講義終了時には、パソコンの基本スキルとワードの基本スキルについて、入学時と同じ質問Q6～Q18をおこない、

Q19 これからも資格取得をしていきたいも加えた。

3. 結果

(1) 入学時アンケート

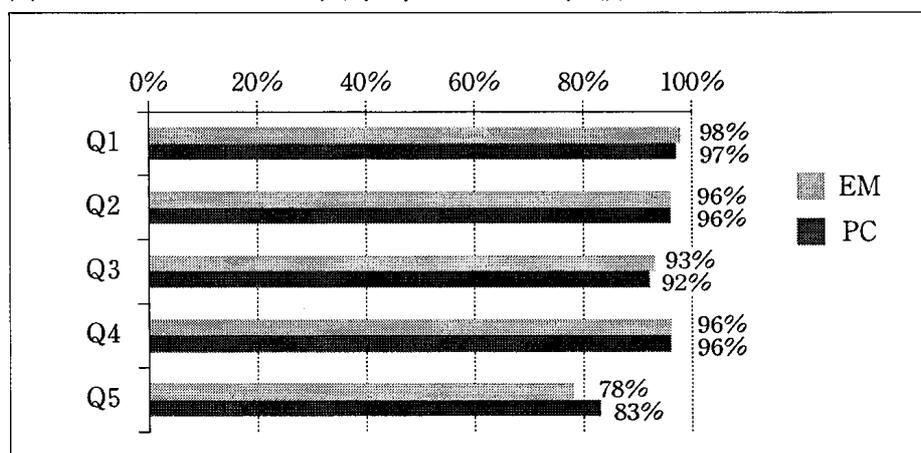
入学時における本学1回生の現状から説明する。

まずは、経験に関する5つの質問結果を図1に示す。

Q1とQ2の結果から、ほとんどの学生がパソコンやインターネットの操作経験があると答えている。パソコンやインターネットが学校や家庭に普及している現状と合致する結果となった。

また、Q3の結果から文字入力もほとんどできていると認識している。メールの作成やインターネットでの情報検索で文字入力は必要とされるためであろう。ただし、講義において、簡単な文字入力はできるが、日本語入力モードを理解して操作したり、ローマ字入力における促音・発音をスムーズに入力したりできる学生は多くはない。

図1 入学時のパソコン経験



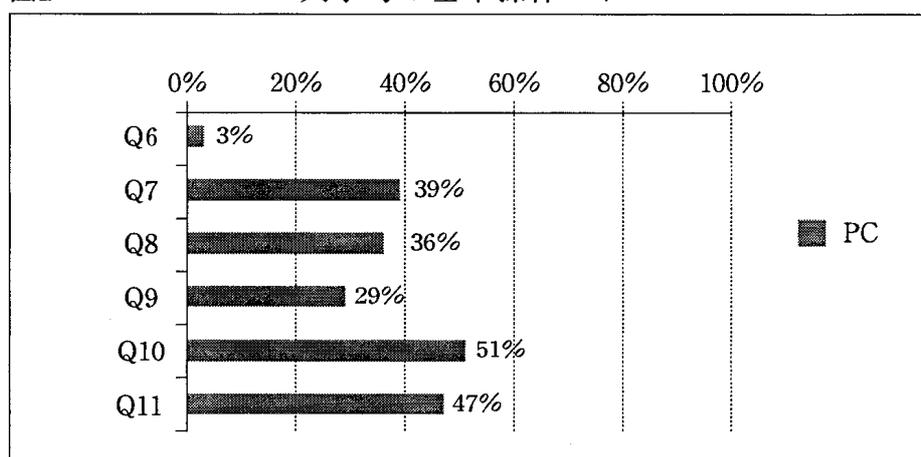
Q4とQ5は、パソコンの実技的な経験の質問であるが、高校での授業経験に関しては、ほとんどの学生が「経験あり」と答えている。ワードの操作経験は、高校での授業で学習したり、自宅のパソコンに「マイクロソフトオフィス」があらかじめインストールされていたりするために、約8割の学生が「経験あり」と答えたのだと考えられる。

全体的に見て、パソコンは学生にとってかなり身近なものになっていることが確認できた。

パソコンの基本操作についての結果を図2に示す。なお、この調査はPC学科のみにおこなった。この結果とQ1～Q5の結果と比較すると、インターネットでホームページを見たり、メールをしたりする程度しかパソコンを操作していない学生が多い(約半数)ことがわかる。

特に、「データの保存 (Q9)」、「フォルダの作成 (Q10)」、「ファイルのコピー (Q11)」の質問の結果からは、ツールバーやメニューバーからクリックするだけでできるデータの保存はできても、フォルダの階層性を理解できてはじめて可能なデータの整理の理解ができていないことがわかる。

図2 入学時の基本操作スキル



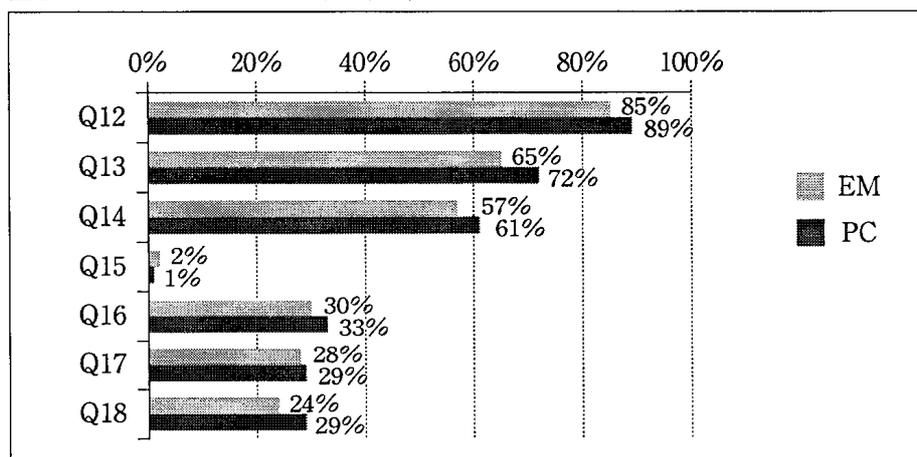
ワードの基本操作についての結果を図3に示す。

文字を入力・修正・書式 (サイズなど) ・配置といった基本的なことまで

はできるが (Q12~14)、それ以降となると全体の3割以下という結果となった。インデントに関しては、こういう言葉を知らないと言った学生も多かった。

ワードの操作経験はあっても単なる文字入力程度のことできないということが判明した。

図3 入学時のワードスキル



(2) 情報リテラシー1 終了時

パソコン基本スキルの結果 (PC学科のみ) とワード基本スキルの結果を図4~6に示す。ここで、講義の効果が分かるようにするため、入学時ものと並べては表した。

「情報リテラシー1の講義を受講することにより、半数以下の学生にしかできていなかった、ファイル操作などのパソコンの基本スキルが、ほぼ100%できるように向上した (PC学科のみ調査)。さらに、ワードの基本スキルについても両学科の学生とも大きく向上した。特に文字入力と、文字配置、表の作成についてはほぼ100%の学生ができるようになった (Q12~15、Q17)。一方、インデントや表の編集は苦手という結果になった (Q16、Q18)。なお、EM学科のインデントについての理解不足は、講義で説明をしなかったことによる。これらのスキルの向上の度合いに違いができた理由として、はじめの4つのスキルは、学生の80%以上が受験した日本語ワープロ技能標準試験

図4 基本操作スキルアップ(PC学科のみ)

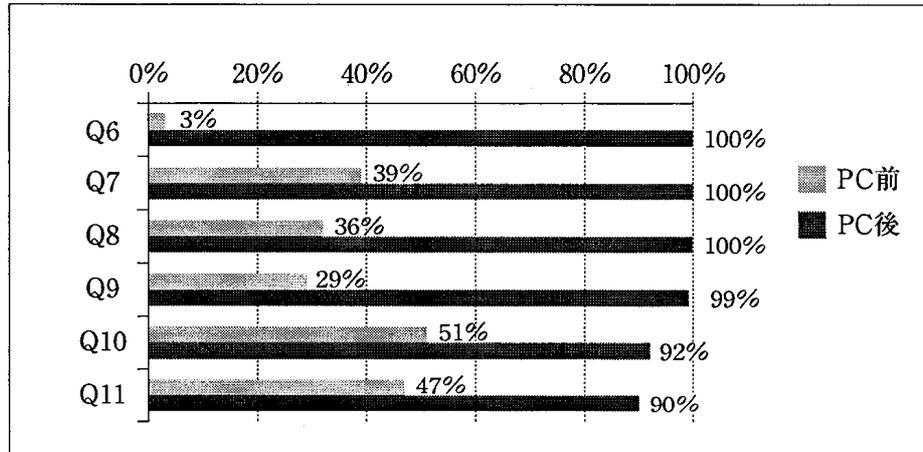


図5 ワードスキルアップ(EM学科)

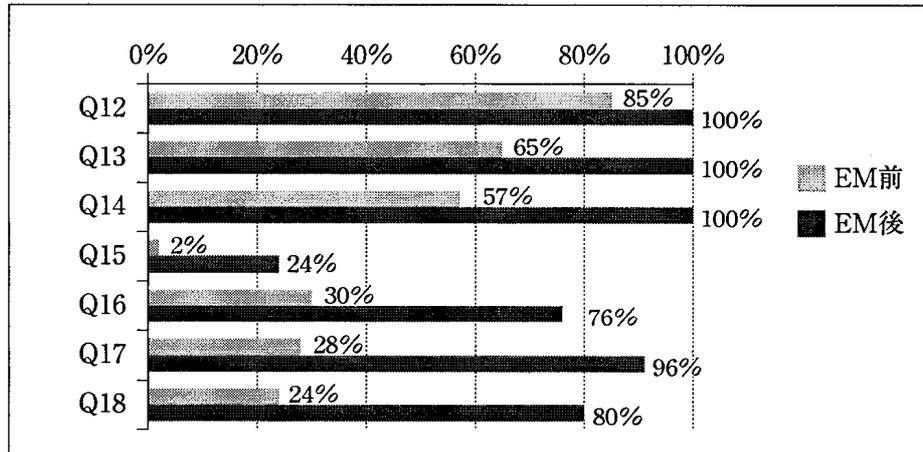
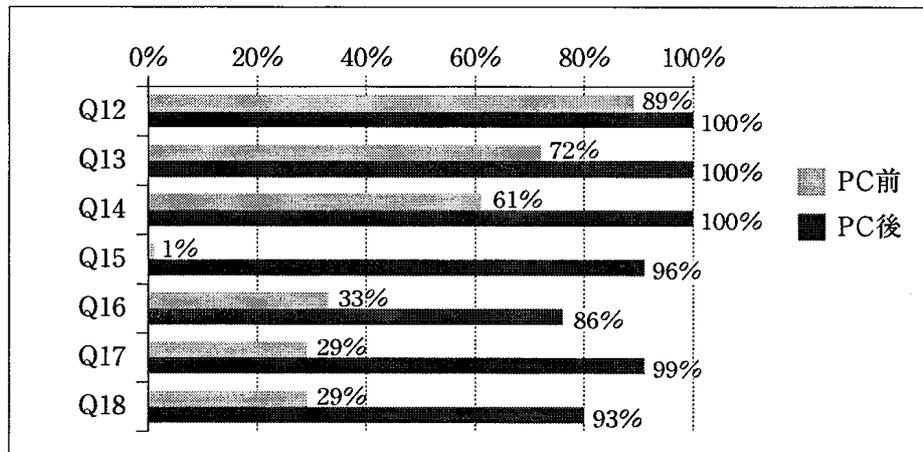
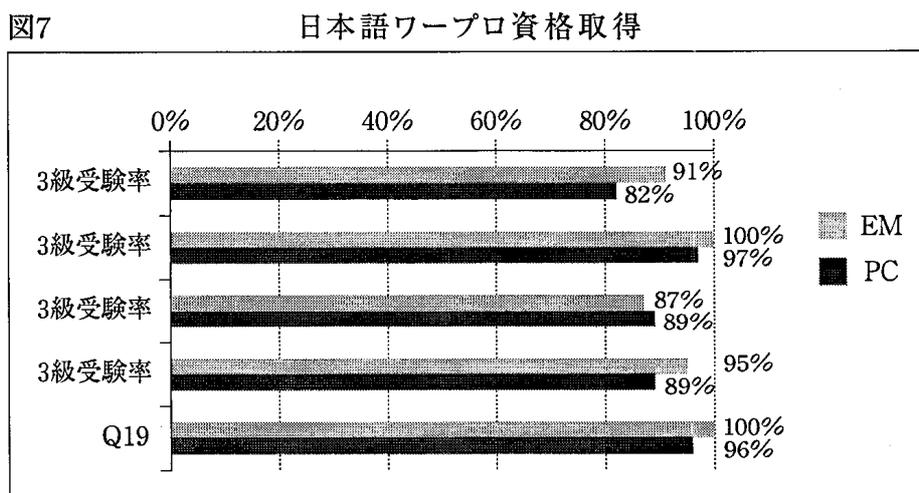


図6 ワードスキルアップ(PC学科)



に合格するために必要なスキルで、後の2つのスキルは、それがなくても合格可能なスキルであるということで学生の学習意欲が異なったことがあるのではないかと考える。

さらに、日本語ワープロ技能標準試験の受験結果と、今後の資格取得意欲(Q19)についての結果を示す(図7)。



なお、合格率は最終取得率のこととした。

2級・3級ともに受験率が80%を超えた。検定は任意受験であったが、学生の資格取得意欲が高いという結果になった。なお、過去のデータから今回受験しなかった1回生も、次年度又は次々年度に受験することが考えられ、その結果から推測すると、実質の受験率は、90%程度になると推測できる。また、合格率も90%以上と非常に高く、自ら進んで受験し、その結果、彼らのほとんどが合格したことになる。検定は入力問題+ビジネス文書作成という科目構成で、入力問題は入力スピードが各級のレベルの速さに到達していないと合格はできない。今回は、ほとんどの学生はビジネス文書作成はクリアできていた。不合格になった学生は、入力問題で基準に達していなかった。入力がクリアできれば、合格率はほぼ100%になっていた(入力に関しては講義だけではフォローができない)。

これらの講義終了後(検定試験終了後)の調査で、実際にさらなる資格取得意欲を持つ学生はほぼ全員となった。PC学科の学生の3人がさらなる資格取得意欲について「いいえ」と答えているのは、本学に保育士取得という目的で入学している生徒が多く、保育士にパソコンの資格が必要であると思わない学生もいるのではないかと思われる。

4. まとめと考察

上記の結果より、本学学生の多くは、大学生に至るまでは、家でパソコンを操作できるという環境にありながら、また、学校ではカリキュラムに組み入れて学習しているという環境にありながら、パソコンの基本操作すら習得しておらずワードに関しても文字入力程度のことしか習得していなかった。大学生の算数・数学力不足が指摘されている中^{2、3)}で、パソコンスキルについても同様の結果となった。

そこで、我々は「情報リテラシー1」の講義の中で、資格取得を動機づけとして、ワードの操作を中心に指導し、その結果、80%以上(実質90%以上)の学生が自主的に検定(日本語ワープロ技能標準試験2・3級)を受験し、その中の90%以上の学生が合格した。それに伴い、パソコンに関するスキルも大幅に向上し、さらなる資格へのチャレンジする気持ちを持つようになった。

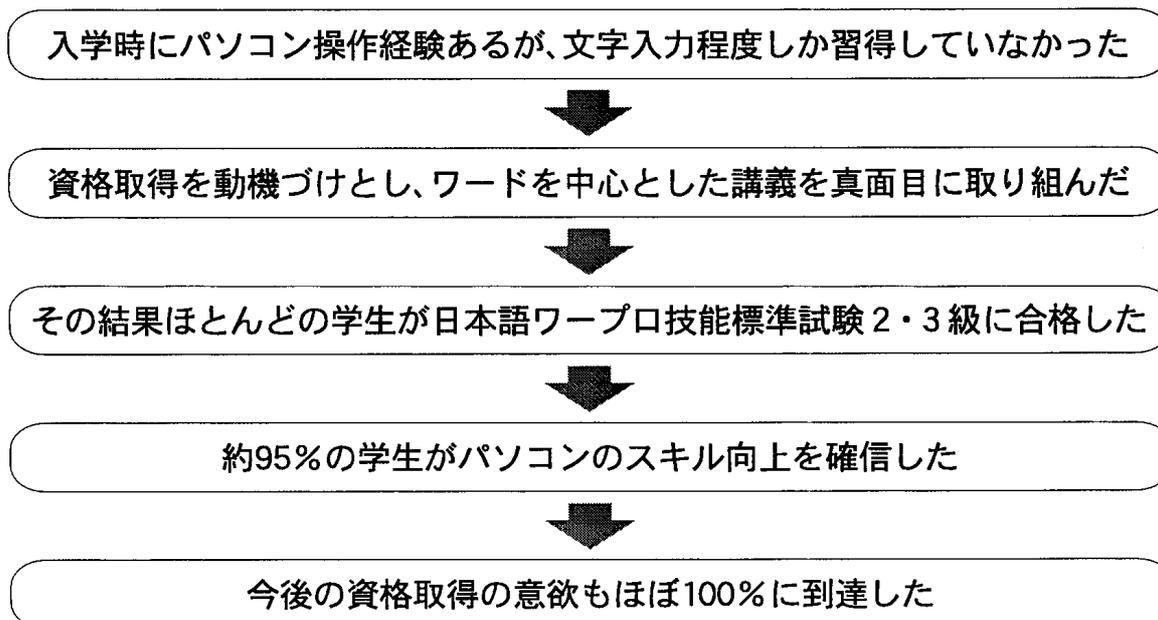
我々は限られた時間内で学生の学力向上のため

- ・ファイル操作や文字入力などの初歩的なスキルを中心に指導する
- ・動機づけとしてワープロ資格取得を利用する

ことを特徴として「情報リテラシー1」の講義をおこなった。

大学全入時代を迎え、必ずしも「学術的な内容(アカデミック)」を期待していたり、必ずしも「高校までの学習内容」を習得できていなかったりという学生が大学へ入学しているのではないか。それらの学生に対して、これまでの専門重視の大学教育をおこなっていて、はたして、学生の満足や学生

の能力向上という結果が得られるのだろうか⁴⁾。今回の調査によって、実際の大学生の現状が明らかになった。そして、それらの大学生の現状に合わせ、資格取得を動機づけとして、「アカデミック」ではない基礎的なスキル習得をめざした講義をおこなうことで能力向上と学生の学習意欲向上に一定の効果があることが判明した。



参考文献

- 1) 樋口勝一 (2007)、日本語ワープロ技能標準試験過去問題集、ノア出版
NPO法人 ICT利活用推進機構ホームページ、<http://rasti.jp/hyojun/>
- 2) 西村和雄他編 (1999)、分数のできない大学生、東洋経済新報社
西村和雄他編 (2000)、小数のできない大学生、東洋経済新報社
西村和雄他編 (2001)、算数のできない大学生、東洋経済新報社
- 3) 樋口勝一 (2005)、表計算ソフトの実習講義における割合学習の重要性、平成17年度全国大学IT活用教育方法研究発表会予稿集、私立大学情報教育協会、pp.16-17
樋口勝一 (2005)、大学生の「割合」の理解についての考察、数学教育論文発表会論文集、日本数学教育学会、pp.795-796
- 4) 浦畑育生 (2007)、さらなる挑戦、大学への挑戦第4号、全国大学実務教育協会、pp.10-13